

但馬皇女歌の特質

— 万葉集卷二・相聞三首について —

森

斌

はじめに

但馬皇女は、母が鎌足の娘の氷上娘で、天武天皇の皇女である。

皇女の境涯を知ろうとするとき、穂積皇子・高市皇子という異母兄弟が参考になる。それは、高市皇子の妻でありながら、皇女が穂積皇子と道ならぬ恋に落ち入るからである。

皇女の誕生については詳かでない。但し、穂積皇子とは同年代と思われ、天智年間には生まれていたのである。没年は統紀によると和銅元年六月のことである。

さて、これから考察することは、但馬皇女が高市皇子の宮に居て、穂積皇子を思つて詠んだ卷二の相聞歌に見られる特質である。

卷二には、三首が記載されているが、それを示すと左記の如くである。

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時、穂積皇子を思ひて作ら

す歌一首

秋の田の穂向きの寄れる片寄りに君に寄りな言痛くありと
も (一一四)

穂積皇子に勅して、近江の志賀の山寺に遣はす時に、但馬
皇女の作らす歌一首

後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈廻に標結へ我が
背 (一一五)

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、竊かに穂積皇子に接
ひ、事既に形はれて作らす歌一首

人言を繁み言痛み己が世にいまだ渡らぬ朝川渡る (一一六)

一、朝川渡る

歌物語的な一つのまとまりを示す相聞三首であるが、そこには語句の解釈という基本的な問題も残されている。その語は、一一六番の第五句「朝川渡る」である。そして、第五句の問題点は、朝に川を渡るといふ表面的な解釈でよいか、穂積に逢うことを決意する寓意までも含むと考えるべきか、その結論が保留されたままになつて

いることである。

いま大久間喜一郎博士と藤田勝氏とが新説を述べられた論文を参考⁽¹⁾に、さらにこれ迄の説をも加えて整理して示せば、「朝川渡る」の解釈は次の如くなる。

Ⅰ 朝に川を渡るという体験的な事実を述べたとする説

- (1) 皇子に逢うために 岩波大系・注釈
- (2) 逢った帰りに皇女が 総釈・私注
- (3) 身をどこかへ隠すために 講義・全註釈
- (4) 袂ぎをするために 松橋手

Ⅱ 譬喩的な表現、或は寓意を踏まえているとする説

- (1) 男女の恋が成る喩え 代匠記・中西進博士
- (2) 浅い契りの譬喩 考・略解
- (3) 「死者の川渡り」という思想を認め、新しい人生の出發を表現した 大久間喜一郎博士
- (4) はげしい恋の情熱を譬喩 藤田勝氏

右に示した如く解釈に諸説があるのは、「己が世にいまだ渡らぬ」という第三・四句に第五句が修飾されていることによる。即ち、「朝川渡る」ということは、ことさら特別な経験と呼ぶべきものでもないが、皇女がわざわざ「己が世にいまだ」と歌っている点に、特殊な意味をもつ行為とみなさなければならぬ。しかも、渡河に特別な意味が含まれた行為とすれば、それは「朝川渡る」という第五句から説明される内容でなければならぬ。

ちなみに、講義・全註釈などは、人言を避けて身を隠すために朝

川を渡ると説明されている。この考えは、皇女がわざわざ身を隠すということに、特殊な経験が説明されることになる。又、岩波大系・注釈などは、人目を忍ぶために早朝に川を渡ることがあって、その慣れない経験が特殊なことだったとした。

だが松橋手・総釈などの説を加えても、朝に川を渡るということでは、「己が世に」という第三句の説明に欠ける。それは、皇女が渡河の経験を「己が世に」などというのだろうか、と思わざるを得ないためである。皇女は高市宮に居たのであり、故郷の飛鳥で生活していた。故郷の川を生涯で渡ったことがないとは考えられない。それにもかかわらず、「己が世にいまだ渡らぬ」と歌うのは、体験そのものを述べたとするより譬喩・寓意を踏まえていると考えるのが適当になる。

大久間博士は「死者の川渡り」という考えを示され、「今までの古い生を振り捨てて新しい人生(あるいは死という人生)へ出發する行事」が朝川を渡ることだと言われる。さらにこの「死者の川渡り」と中国詩の用例をも参考に、藤田氏は「恋の苦しさに死にそうです」という意味を「朝川渡る」の句から帰納させた。これらの二説は、はなはだ興味深いものであるが、万葉集から「死者の川渡り」という思想を踏まえた他の歌、乃至類似した恋の苦しみを詠んだ成句をもつ歌が見出し得ないことに、躊躇が残る。同様に、考・略解などの考えは、原文「朝川」を「浅川」の借訓として論を展開させなければならず、疑問を解決するに至らない。そこで問題としたいのが、契沖・中西博士説である。

代匠記(精撰本)には、「男女の中を川に喩て、ならぬをば渡らぬに喩へ、成るをば渡るに喩ふ」と記されている。⁽²⁾また、中西博士

は、「中国に渡河は男女相会うこと」として、朝に女が人言を憚って訪れることを指摘されている。⁽⁵⁾

契沖は皇女の具体的な経験に基づくとせず、譬喩表現とした。しかし、単に渡河を比喻と見るより、それは皇女の行動であり、背後に寓意が踏まえられているのではないか。

例えば、恋の障害として川を、その川を渡ることでの恋の成就もたらされることを、それぞれ歌い込めたものが見出し得る。例歌としては、次の二首が参考になる。

丹生川の川瀬は渡らずゆくゆくと恋痛し我が背いで通ひ来れ

(一・一三〇)

利根川の川瀬も知らず直渡り波に逢ふのす逢へる君かも

(十四・三四一三)

一三〇番では、恋が成しとげられないことを「瀬を渡らず」と表わされている。又、三四一三番で譬喩に使用された「直渡り」とは、渡河が恋人に逢うための方途であることが認められて、はじめに理解できる句になる。この他に渡河が詠まれている相聞歌は、十四首にも及んでいる。従って、川を渡することは、中西博士のいう「男女相会う」ことであり、恋の成就を願う行為であると認めてよい。さらに「己が世にいまだ渡らぬ」という表現を解するためには、七夕歌が参考になる。

七夕伝説では、本来の渡河者が女性たる織女星である。ところが万葉集に詠まれた川を渡る人とは、ほとんど男性になっている。伝来した話がかく変質してしまうのは、小島憲之博士が「地上の妻問いの習俗を天上の七夕伝説に」反映したとする原因による。即ち、

男女の逢会では、男が女の許に行くのであり、女の行為に渡河がなり難かったのである。その意味で、但馬皇女が「己が世にいまだ渡らぬ」というのは、当然と思える。

一六番にある「朝川渡る」とは、恋の成就を願う寓意と実際に川を渡る行動とが含まれて表現された句である。そして、この行動は、まさしく「己が世にいまだ渡らぬ」という程の決意を必要とした。ところが、世間の常識にあえて反発した行為であるにもかかわらず、一六番の題詞に「竊」と記されているのは、少しく疑問を生じる。

二、「竊」かな恋

さて、万葉集では、「人目」「人言」という語の使用された相聞歌が多い。そのことから人目と人言が男女の仲を割く障害であることが、古今の通例となっていたと知られる。家持が坂上大嬢に贈った歌には、「人目人言こちたみ我せむ」(四・七四八)という句があり、これら二つの障害が同時に詠まれている。では、但馬皇女はどうであろうか。

皇女は、「言痛くありとも」(一一四)「人言を繁み言痛み」(一六)と歌う。まさしく他人の噂に気がねし、注意深く人言に対処している姿がそこにある。その意味で言うと、一六番の題詞にある「竊」とは、人の噂をはばかったり、人目を忍びわざわざ朝に渡河したことが配慮されて使用された、と考えられる。しかし、この題詞にある「竊」は、個人的な事情だけで説明するのも不十分と思われる。それは、巻二の相聞歌に多く「竊」が、作歌事情の説明に

使用されているからである。卷二の題詞・左注に記された「竊」の用例は、次の如くである。

遂に竊かに通けぬ (九〇・左注)

大津皇子、竊かに伊勢の神宮に下り上り来る時に

(一〇五・題詞)

大津皇子、竊かに石川女郎に婚ふ時に

(一〇九・題詞)

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、竊かに穂積皇子に接ひ

(一一六・題詞)

以上の四例が卷二に使用されたものであるが、九〇番の左注が允恭紀二三年の記述と同文であり、作者に対する疑問から引かれていて、作者か編纂者か、そのどちらかの立場で記された例は、三例である。又、万葉集の他巻で用いられた例は、憶良の二例が「竊以」と文章の起首に用いられた以外、他が全て相聞歌の題詞と左注に使用されている。

紀皇女竊かに嫁きて

(十二・三〇九八左注)

二の親に告げずして、竊に交接を為す (十六・三八〇三題詞)

時に女子あり、父母に知らせず、竊に壮士に接る

(十六・三八〇六左注)

卷十二の例は、伊予国司に左遷された高安王への相聞歌に用いられている。卷十六の二例は、両親を無視した恋であるところから使用された。卷二と卷十二に用いられた四例は、他人に知られること

を憚ったという以上に、そこに編纂者の配慮が働いていそうである。即ち、大伯皇女・大津皇子・但馬皇女・紀皇女は、それぞれ天武の皇子女であり、そこに何らかの要因があると考えられるためである。

伊藤博士は、大伯皇女の歌(一〇五)と大津皇子の歌(一〇九)とに添えられた「竊」という題詞の文字を、草壁・持統側への配慮を込めた表現とされた。但し、但馬皇女の場合、持統天皇側への配慮と呼べるにしても、謀反の罪をおかした大津皇子と異なるものが考えられる。即ち、持統朝に於いては、ことさら兄弟の和を重んじていたことである。

天武紀八年五月の条に記された有名な詔には、「千歳の後に、事無からしめむと欲す」とあり、天武・持統が吉野宮に御幸されたときの草壁・大津・高市・河島・忍壁・芝基という六皇子に対する盟を課している。皇子たちに誓わせる詔を下したのは、壬申の乱を経て即位した天武天皇にとって当然のことである。わざわざ和を誓わせたのは、このとき既に争いが生じていたのであろう。

兄天智天皇との確執は、大乱をもって終結しなければならなかった。人は偏頗な存在である。天武天皇は、兄弟の対立をことさら配慮したであろう。その天武天皇の政策に忠実な持統朝にも、この天武の和を重んじた詔は生きていたと考えてよい。

その持統天皇の御代に、但馬と穂積とは恋に落ちている。そして、兄高市皇子の宮に居ながら、但馬は異母兄に恋をした。この二人の愛は、高市と穂積との対立に発展する可能性を秘めたものである。しかも、二人の恋は、天武の遺戒に正面から背くものである。

以上の如く考えるとき、天武の皇子と皇女に関わる歌で「竊」が

使用され、そして竊かな恋でなければならなかった必然性も理解される。兄弟の和に破綻を来たす事柄は、とりわけ配慮されたであろうし、竊かな恋もそこに生じることになった。

かく竊かな恋でなければならなかったが、但馬皇女は穂積皇子に歌を贈ったのであろうか。

三、独詠歌と贈答歌

但馬皇女の歌は、四首万葉集に収められている。巻二に収められた三首と巻八の秋雑歌に収められている一首であるが、巻八の一首は、穂積皇子と並記されている。

穂積皇子の御歌二首

今朝の朝明雁が音聞きつ春日山もみちにけらし我が心痛し

(一一五三)

秋萩は咲きぬべからし我がやどの浅茅が花の散りぬる見れば

(一一五四)

但馬皇女の御歌一首一書に云はく、子部王の作

言繁き里に住まずは今朝鳴きし雁にたぐひて行かましものを
一に云く、因にあらずは

(一一五一)

このように並記され、さらに「雁が音」(一一五三)と「雁にたぐひて」(一一五一)とが対応している内容をもつのは、穂積と但馬との贈答歌がここに収められたためと考えられる。しかし、穂積皇

子の一一五三番は、秋の愁えを歌っている。その歌に春日山が登場していて、但馬が薨じた和銅元年、いや平城遷都の和銅三年以前に成立したとも、穂積の歌は考え難い。一方皇女の歌には、異伝も記されていて、伝承歌が記載されたらしい。恐らく、雁・萩が詠み込まれた歌であるために、たまたま同時代の歌人ということ、一五三番から一五一五番までの三首は並記されたと思われる。むしろ、これら三首が贈答をなしたのであれば、巻八の秋相聞の部に録されてしかるべきであった。

穂積皇子は但馬へ相聞歌を一首も贈らなかつた。ところが、恐らく和銅元年の冬のことであろう、皇子は挽歌をもした。

降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに

(一一〇三)

右の歌は、大雪に寄せて、ありし日の皇女を思い出し、哀惜の情を詠んでいる。その死者に対する温かい思いやりは、雪の降る冷々とした猪養の岡と対比され、逆説的に連想を強まらせている。この忘れ難い皇女への情が示された歌である。また、酒に酔うと口ずさんだという歌が、巻十六に記されている。

家にある櫃に鍵さし蔵めてし恋の奴のつかみかかりて

(三八一六)

再び恋などしないと思いながら、やはり恋のとりこになつたという内容が詠まれている。この歌を好んで口ずさむのは、皇女への追

想がそうさせるのであろう。このように忘れ難い恋情が示された歌が皇女の死後に詠まれていて、生前には何故に歌われなかったのであろうか。或は、但馬皇女も歌を皇子へ贈らなかつたのであろうか。

但馬皇女は、一一六番で恋の成就を願ひ朝川を渡つた。その後については、日本古典文学全集で「異母兄の穂積皇子のもとに移つた」と推定されている。即ち、「朝川渡る」が恋の成就を願う行動であり、皇子に逢うためであつたのだから、皇女は高市皇子の許へもどることがなかつたのであろう。「己が世にいまだ渡らぬ」とあるのは、「事既に形はれて」という状態を踏まえるとき、夫をかえる程の決意を必要とする。恐らく、皇女の行動は、再び高市皇子の許へもどることを不可能にさせた、と考えてよい。

以上の事柄を確認して、卷二の相聞歌三首が如何なる内容を示すか、その考察をしたい。まず、一一四番は、自分のどうしようもない恋情のやるせなさを表白している。即ち、第四句の「君に寄りなな」とは、額田王の「今は漕ぎ出でな」(八)と呼び掛ける意がななく、皇女の願いを示しているに過ぎない。従つて、穂積皇子へ「寄りなな」と呼びかけるより、皇女の内面へ願望が食込むことになる。まさしく、一一四番は内省がまさつた歌と考えられる。一一五番は、どうであらうか。

この歌は、上三句で山寺に遣わされた皇子を追いかける決意を述べ、第五句が「標結へ」と命令形で中止させ、さらに「我が背」と体言止めにした。その巧みな表現の方法からは、皇女が己のやるせなさを皇子に訴えようとした生々しい恋情が示されたことになる。

但し、この皇子に呼びかけた「標結へ我が背」とは、穂積に直接

贈る目的があつたから、かく詠まれたと思えない。それは、このような内容を相手に要求する状況でなかつた。持統朝とは、竊かな恋しかこの二人にさせなかつた。「標結へ我が背」と呼びかけることは、配慮に欠ける要求である。その意味で、皇子を追いかけたという表面的な願ひより、「ずは……まし」とあるべき形式をあえて「ずは……む」と言い切つて、乱れに乱れた感情を払おうとしたのが一一五番の歌ではないだろうか。表面上、皇子に贈つて直接己の恋情を訴えようとした如くであるが、むしろ己の心情を断定的に「む」と言い切つて、心のわだかまりを解放しようとしたのが、結びの句「標結へ」と中止させ、「我が背」と体言止めにしたのであろう。従つて、一一五番は贈歌というより、独詠的な内容を示す。

一一六番については、第一節で少しく触れた。「朝川渡る」という決意を述べたものであるから、贈るべく作歌されたものではない。やむにやまれず一一六番は詠まれた歌である。しかも、皇女は歌に示した如く「朝川」を渡り、皇子との恋を成しとげたのである。

以上の如く、但馬皇女の卷二に収められた詠歌は、皇子に逢いたくてもままにならない現実と直面して、己の心情の解放と決意とを託した内容である。そして、それらは贈る目的で詠まれたというより、むしろ独り居て詠んだ歌といふべきである。もし、贈歌という意図があるのであれば、皇子の心情を考慮した竊かさが歌にあつてよい。その竊かさに欠けるのは、独詠として作られたからである。

ところで、卷二の三首が独詠されたとする、歌の内容と題詞の記述とは、微妙にずれるところがある。そのずれに注目して、次節は歌物語といふことを考察したい。

四、歌物語の成立

但馬皇女歌の三首は、歌物語と呼ぶべき性格が認められる。それは、歌作の連続と題詞に表現された詳しい作歌事情から、場面の転換をはかり全体を結ぼうとする叙事が感じられるからである。そこで、題詞を参考にそれぞれの成立を考えたい。

まず一四番であるが、天武八年の戒めにもかかわらず、二人の愛が芽ばえ始めた頃、世間の人々に評判になって詠まれたのがこの歌ということになる。一一五番は、穂積皇子が山寺（崇福寺）に遣わされたときの作である。ちなみに黒沢幸三博士は、「私は前の歌との関連から、六九〇年の春を考えたい」と皇子の派遣の年を推定されている⁽¹⁰⁾。持統四年（六九〇）に、高市皇子が太政大臣に就任しているし、恐らく一一五番はその頃の成立と見てよいであろう。次の一一六番は、持統四年から高市薨去の持統十年迄に詠まれたこととなる。

さて、高市・穂積の両皇子は、多数の舍人・女嬬等を使用していたであろう。かかる状況で、但馬が何年間も高市に穂積との関係をはたして秘密にしておけただろうか。又、高市の宮に居ながらの不倫の恋に対して、世間の人が好奇心を持って噂しないであろうか。

思うに、愛が芽ばえてから何年も続いた恋だったにせよ、一一四番の人言の始まりから一一六番の朝川渡り迄は、皇女が高市の宮に居たある特定の一時期に起きた出来事と思える。それは、皇子が山寺に遣わされた時を境にした前後という意味である。山寺への派遣

を持統四年としたら、そのときに独詠として連作されることにならないか。皇女の相聞三首は、追い詰められた心情を歌に託した一致点が見られる。やはり連作されたが故に生じた心情の連綿は、独詠ということに表われたと考えたい。

今述べた連作ということを考えるために参考にしたい歌がある。万葉歌では、既に引用した巻八・一五一五番である。この歌は、伝承歌らしいが、雑歌に収められていても相聞の内容がある。歌詞には「言繁き里に住まずは」などとあって、黒沢博士が既に述べられている様に、二人の愛が芽ばえ始めた頃の作であろう。又、ほぼ同時期の作歌と思われる一首が、歌経標式に記されている。

如下但馬内親王答穂積親王二歌曰上

今更に何か思はむ宇可那婢俱心は君によりにしものを

右の歌とほぼ同文の歌が万葉集に収められ、作者は安倍女郎である。その歌は、巻四・五〇五番で、又その類歌も多い。歌経標式の歌は、第三句が語義不明なため原文で引用したが、恋歌と呼んでよい。

巻八と歌経標式とに収められた皇女歌は、恐らく伝承されていたものである。その性格から、どこまで但馬皇女の作として考慮すべきか問題はあはる。しかし、それら二首と巻三の三首とは、決定的な相違が見られる。一つは、贈歌と独詠という性格、さらには類型と個性という性格、それら対比される違いとは、伝承と書承ということに通じる。

巻二の相聞三首は、独詠歌である。しかも、一途にならざるを得

なかつた皇女の心情に、躊躇いと決意という二重の性格が基礎となつた相聞三首は、高野正美氏の「歌は類型に墮することなく」という評につながる。従つて、但馬皇女歌は、二分類されることになる。つまり、類型的な内容を示す伝承歌と皇女の生地が伺える書承歌というグループがそれである。

ここで注意すべきことは、この伝承歌が存在していたことである。巻八と歌經標式とに記載された詠歌の存在は、但馬皇女の恋物語が宮廷の貴族の間に伝承されていたことを語る。そして、その恋物語が享受されていた背景としては、「竊」という言葉に示された持統朝という特殊性がある。その持統朝とは、竊かな恋物語が好んで享受された時代であつた。

とすれば、皇女の恋物語が既に存在して宮中で伝えられていたと思われ、巻二の編者が書承歌に歌語りの興味をもつのも当然である。例えば、大伯皇女歌の一〇五番、大津皇子歌の一〇九番などに添えられた詳しい題詞は、歌語りの興味からであろう。同様に、書承の性格を示す但馬皇女歌の三首が詳しい内容の題詞を添えられているのは、まさに歌語りの興味からと考えてよい。しかも、歌語りの興味に基づく作歌事情を説明した題詞は、少しく内容にずれを生じさせている。

即ち、独詠的な内容と悲愁とに貫ぬかれた個性の見られる三首は、連作の如き立場から題詞が記されるべきものである。例えば、それは「穂積皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣はす時、但馬皇女の作らず歌三首」などで充分だつた、という意味である。思うに、これら三首の作歌事情としては、状況の転換や発展を伺わせる叙事が加わらなくて充分だつた、と思われる。

ところが、それぞれの歌に詳細な題詞が記載された。しかも、題詞と歌との組合せは、心情の持続した詠歌三首に叙事までも加えたのである。それは、既に伝承されていたであろう歌語りによる叙事である。従つて、巻二の相聞三首とは、書承歌による但馬皇女の新しい恋物語になつた。

以上、巻二の編纂者が示した歌語りの興味のために、新しい歌物語が誕生したことを述べて見た。その歌物語が但馬皇女の書承歌であつた相聞三首である。

結 び

但馬皇女は、万葉集に四首が録された歌人である。それらは、伝承歌と書承歌という性格の相違を示していた。その書承歌として万葉集に記載された巻二・一一四〜一一六番の三首を、本論では採り上げて考察を加えた。

その考究の過程で明らかにした事柄は、次の如き特質である。即ち、(一)「朝川渡る」(一一六)の句は、恋の成就を願ひ川を渡る行為と寓意とが含まれた意味をもっていた。(二)「竊」(一一六)という題詞に使用された文字から、兄弟の和を重視した持統朝の特殊性が認められた。(三)皇女の歌は、相聞でありながら、贈歌として作られず、独詠として詠まれた。(四)歌語りの興味が、既に存在していた恋物語に支えられ、新しい歌物語りを誕生させた。

〔注〕

- 1 大久間博士 「川を渡る女——但馬皇女をめぐって——」
（『国学院雑誌』68巻9号）
- 藤田氏 「『朝川渡る』の解釈について」（『美夫君志』21号）
- 2 注1大久間博士の論文
- 3 注1藤田氏の論文
- 4 『契沖全集第一巻』（岩波版） 四五九頁
- 5 『万葉集（一）』（講談社文庫） 一一六番脚注
- 6 試みに歌番号を示す。一三〇・五二五・五二八・七一五・二七五・二四二八・二四二九・二七〇一・二七〇五・三二五六・三三三七・三三〇三・三三一三・三三六八
- 7 「万葉集から古今集へ」（『万葉集講座第四巻』（有精堂版）所収）一〇四頁
- 8 「恋物語の傾向」（『万葉集相聞の世界』所収） 一二五頁
- 9 『万葉集（一）』二〇三番頭注
- 10 「穂積皇子と但馬皇女」（『文学』46巻9号）
- 11 注10に同じ。
- 12 「但馬皇女論」（『上代文学』15号）
- 13 歌語りの定義については、片桐洋一氏「歌物語の淵源と歌語り」（『伊勢物語の研究』研究篇）所収）と伊藤博博士「歌語りの世界」（『古代和歌史研究5』所収）を参考にした。伊藤博博士は、「貴族の社交場で語られるさまざまな和歌に関する話」と述べられている。同博士著 一三頁より引用。